

母子相互作用の発達心理学的研究

研究協力者 小 嶋 謙四郎（早稲田大学）
大 藪 泰（長野大学）
田 口 良 雄（上田市立産院）
百 名 盛 之（京都大学）
繁 多 進（横浜国立大学）
依 田 明（横浜国立大学）

はじめに

乳児期の母子相互作用が、小児のパーソナリティの発達と健康の保持に果たす役割をあきらかにし、その研究成果を発達障害の予防、早期発見、早期指導の理念や施策に反映させ、乳幼児保健指導の指針作成に活用させることを主たる研究目的として、この班は編成された。

研究テーマを1) プレアタッチメント期の母子

相互作用（大藪、田口担当）2) アタッチメント形成期の母子相互作用（百名）3) アタッチメント確立期の母子相互作用（繁多）4) 母子の分離・自立（依田）5) 乳幼児保健指導と母子相互作用仮説（小嶋）の5領域にわけ、分担研究をおこなうことにした。

本年度は初年度であるので、計画段階あるいは、予備調査の報告である。

プレアタッチメント期の母子相互作用

大 藪 泰 ・ 田 口 良 雄

研究目的

乳児が生得的に有する行動状態は、母親に対するシグナルとしての機能を持ち、乳児期初期の母子相互作用に関与する要因のひとつと考えられる。特に啼泣は母親を自分のほうに引き寄せるシグナルとして、また覚醒は引き寄せた母親との接近を維持するシグナルとしての役割をはたしている。

乳児の行動状態間の継起は発達するにつれて変化すると考えられるが、本研究では啼泣と覚醒との連続性に注目し、「啼泣と覚醒は次第に連続性を増し、母子相互作用の形成により効果的な機能を発揮するようになる」との仮説をもうけ、早期産児と満期産新生児の啼泣と覚醒との移行関係を検討した。

研究方法

対象児

○早期産児

都立小児保健院未熟児室に入院していた男児2

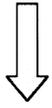
名、女児8名。誕生時の在胎週数：31週3名、34週2名、35週4名、36週1名。平均出生体重：1850g。分娩：自然分娩。Ap. s. (1min)：1名が6、その他は8以上。誕生後の経過：良好。

○満期産新生児

上田市産院で誕生した男児3名、女児5名。平均在胎週数：39.9週。平均出生体重：3,093g。Ap. s. (1min)：8以上。妊娠および分娩：異常なし。健康新生児。

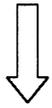
手続き

対象児を直接視覚的に観察し、その行動状態を10秒ごとに評定した。行動状態は①睡眠：閉眼で眼球運動がある場合もない場合もある。②まどろみ：視線が定まらずまどろんでいる状態で、眼瞼の不随意的な開閉がみられる。③覚醒：眼瞼がしっかり開かれている状態、④啼泣：泣き顔と泣き声がみられ、眼瞼は開かれている時も閉じられている時もある、の4種類である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

乳児期の母子相互作用が、小児のパーソナリティの発達と健康の保持に果す役割をあきらかにし、その研究成果を発達障害の予防、早期発見、早期指導の理念や施策に反映させ、乳幼児保健指導の指針作成に活用させることを主なる研究目的として、この班は編成された。

研究テーマを 1) プレアタッチメント期の母子相互作用(大藪, 田口担当) 2) アタッチメント形成期の母子相互作用(百名) 3) アタッチメント確立期の母子相互作用(繁多) 4) 母子の分離・自立(依田) 5) 乳幼児保健指導と母子相互作用仮説(小嶋)の5領域にわけ、分担研究をおこなうことにした。

本年度は初年度であるので、計画段階あるいは、予備調査の報告である。